

プロレタリアートと小生産者との関係

「……勤労・被搾取大衆の不満が増大し」——これは正しい。だが、ここでなされているように、プロレタリアートの不満と小生産者の不満とを同一視していっしょにするのは、まったくまちがっている。小生産者の不満は、きわめてしばしば、小所有者としての自分の存在をまもろうとする、すなわち、こんにちの制度の基礎をまもり、この制度をあともどりさえさせようとする志向を生み出すのである（そして、彼らにあっては、あるいは彼らのかなりの部分にあっては、不可避免的に生みださないわけにはいかない）。

「……彼らの闘争が、そしてまず第一に彼らの先進的代表者たるプロレタリアートの闘争が、激化する……」。闘争の激化は、もちろん、小生産者のあいだでもすすむ。だが、彼らの闘争の鋒先はきわめてしばしば、プロレタリアートにたいして向けられる。なぜなら、小生産者の地位そのものが、きわめて多くの点で彼らの利益をプロレタリアートの利益にするどく対立させるからである。一般的に言えば、プロレタリアートは、小ブルジョアジーの「先進的代表者」ではけっしてない。そういうばあいがあるとすれば、それは小生産者が自分たちの滅亡の避けられないことを自覚するとき、彼らが「彼ら自身の立場を捨ててプロレタリアートの立場に立つ」『共産党宣言』選集、第二巻、501 ページ）ときだけである。まだ「自身の立場を」捨てていないこんにちの小生産者の先進的代表者となるのは、きわめてしばしば、反ユダヤ主義者や大農業地主、民族主義者やナロードニキ、社会改良家や「マルクス主義批判家」である。そして、小生産者の「闘争の激化」に伴って、「山獄党」にたいする「社会主義的ジロンド党」の「闘争が激化している」現在においてこそ、ありとあらゆる種類の激化をまぜあわして一つにしてしまうのは、もっとも不適當なのである。

「……国際社会民主主義は、勤労被搾取大衆の解放運動の先頭に立っている。……」けっしてそうではない。それはただ、労働者階級だけのただ労働運動だけの先頭に立っているのであって、もしこの階級にその他の分子が味方するとしても、そうするのはまさしく、もろもろの分子であって、階級がそうするのではない。そしてこれらの分子が、完全に、全幅的にこれに味方するのは、彼らが「自身の本来の立場を捨てる」ときだけである。

「……それは、彼らの戦闘力を組織する。……」これも正しくない。社会民主党はけっして小生産者の「戦闘力」を組織しはしない。それはただ、労働者階級の戦闘力だけを組織する。草案でえらばれている定式化は、ロシアを念頭において書かれたものでなければいけません。叙述が「発展した」ブルジョア社会に限定されていなければいけません（第五節を参照せよ）、ますますまずいものになっている。

Sumina suminarum [総括]。草案は積極的な形で小ブルジョアジーの革命性（もし彼らがプロレタリアートを「支持する」とすれば、それは、小ブルジョアジーが革命的だという意味になるのではないか？）をかたっており、彼らの保守性（そればかりか、反動性）についてはひとことも述べていない。これはまったく一面的であり、まちがっている。

われわれは、積極的な形では小ブルジョアジーの保守性を指摘することができる（そして、指摘する義務がある）。そして彼らの革命性については、われわれはただ条件的な形でのみ、指摘しなければならない。このような定式化だけが、マルクスの学説の全精神に

厳密に合致したものであろう。たとえば、『共産党宣言』は、はっきりとこう言明している。「ブルジョアジーに対立しているすべての階級のなかで、ひとりプロレタリアートだけが、真に革命的な階級である。……小工業者、〔小商人〕、手工業者、農民は……**革命的ではなく保守的である**。そればかりか、彼らは反動的である……もし彼らが革命的になるとすれば（「もし」だ！）、それは彼らが、自分らのプロレタリアートへ移行する時がせまっているのを見てのことである。……〔そのばあいには彼らは〕彼ら自身の立場を捨ててプロレタリアートの立場に立つのである」〔同所〕。

『共産党宣言』の時代以後の半世紀のあいだに事情が本質的に変化したのだ、などと言いたまうな。ほかならぬこの点では、なに一つの変化（も）していないのだ。理論家たちも、この命題をつねに、たえず承認してきたし（たとえば、エンゲルスは、一八九四年にまさしくこの立場からフランスの農業綱領を論駁したのだ。彼は率直にこう論じた。小農が自分の立場を**捨てないかぎり**、彼らはわれわれの味方ではなく、彼らの居場所は反ユダヤ主義者のところである。彼らはこの反ユダヤ主義者によっておもしろられるがよい。そうすれば、ブルジョア諸党が彼らをだませばだますほど、彼らはますます確実にわれわれのところへやってくるであろう、と）〔『フランスとドイツの農民問題』選集、第一七巻、四四六ページ〕、また大衆によるこの理論の現実の確認も、ついさきごろまでの歴史によって、nos chers amis〔わが愛する友〕の「批判家」諸氏にいたる歴史によって、あたえられている。

ついでながら、この草案には、はじめの草案にあった**プロレタリアートの独裁**についての指示がはぶかれている。たとえこれが偶然になされたことであり、見おとしによるものであったにせよ、——とにかく、「独裁」の概念とプロレタリアートにたいする外部からの支持を**積極的に**みとめることが相いれないということは、疑う余地がない。もし、プロレタリアートが彼らの革命、プロレタリア革命を成就するさいに小ブルジョアジーがプロレタリアートを支持するということを、われわれがほんとうに**積極的に**〔断定的に〕知っているなら、「独裁」をかたる理由はなにもないことになる。なぜなら、そのばあいには、圧倒的多数者がわれわれに味方することが完全に保証されているので、独裁などなくてもりっぱにやっていけるだろう（「批判家たち」が人々にそう信じさせようとのぞんでいるように）からである。プロレタリアートの**独裁**の必要をみとめることは、ひとりプロレタリアートだけが真に革命的な階級であるという『共産党宣言』の命題と、**もっとも緊密に、切っても切れないように**結びついているのである。

（ついでに言えば、エンゲルスがこの点でどれほど「警戒心がつよかった」かということとは、彼のエルフルト綱領草案批判のうちのつぎの章句からして知られる。エンゲルスは《Der Ruin weiter Volksschichten》〔広範な人民層の零落〕という草案の言葉を引用して、つぎのように述べている、〔ブルジョアや小ブルジョアの零落までがわれわれをかなしませるかのような感をあたえるこの演説文句のかわりに、私は単純な事実をかたりたい。つまり、「それらは、都市・農村の中間層、すなわち小ブルジョアと小農民の零落を通じて、有産者と無産者とのあいだの深淵をひろげる」（または、ふかめる）とする〕〔同、三八〇ページ〕。（エルフルト綱領草案にはつぎのような章句があった。〔この解放闘争において社会民主党は、たんに賃金労働者だけでなく全体としての被搾取者と被抑圧者の擁護者（または、代表者）として、一般に人民の、とくに労働者階級の状態を改善するのに適

したいっさいの要求、方策および施設を擁護する]。そして、エンゲルスは、この章句全体を削除するように積極的に勧告したが、そのさい、つぎのように言って嘲笑せずにはいられなかった。[一般に人民(とはだれのことか?)]と[同、三八三ページ]。そして、エンゲルスの勧告にしたがって、この章句は**すっかり捨てさられた**のである。また、「労働者階級の解放は、労働者階級の事業でしかありえない。なぜなら、**その他のすべての階級〔と党〕は、生産手段の私的所有の〔資本主義の〕基盤に立っており、こんにちの社会の基礎を維持〔し強化〕することを共通の目標としているからである**」という〔第8〕節は、**エンゲルスの直接の影響のもとに、はじめの草案よりも鋭い形で採用された**のである。)

こう言って私に反論する人がいる。対抗草案には小生産者の保守性は積極的に言いあらわされている(「こんにちの社会のその他のすべての階級は、現存の経済体制の基礎を維持する立場に立っている」)けれども、その革命性のほうは**条件的にさえ言いあらわされていない**、と。

この反論はまったく根拠がない。対抗草案では小生産者の条件的な革命性は、まさにそれ以外には言いあらわしようのない唯一の仕方、すなわち、**資本主義にたいする告発の定式化によって、**言いあらわされているのである。

小生産者の条件的な革命性はつぎの点に言いあらわされている。

(一)——資本主義が彼らを**駆逐し、零落させる**ことを述べている句において。われわれプロレタリアートは、資本主義が農民の**零落**を通じて大規模生産に導くということで、資本主義を告発している。このことからして、**もし農民がこの過程の避けられないことを理解するなら、「自身の立場を捨ててわれわれの立場を採用するであろう」**という結論が直接に出てくる。

(二)——「生活の不確かさと失業、搾取の圧迫と、あらゆる種類の屈辱が」、(プロレタリアートだけでなく)「**勤労住民のますます広範な層の運命となる**」という句において。まさにこの定式化そのものに、プロレタリアートが勤労住民全体を**代表**することが、言いあらわされている。しかもその代表とは、われわれがすべての人に、**彼らの立場を捨ててわれわれの立場に立つようにすすめる(そして強いる)**のであって、その反対ではなく、われわれが自分の立場を捨てたり、自分の階級闘争をあらゆる二股分子と融けあわせたりしないという、まさにそういう代表なのである。

これとまったく同様に、代表の思想は、

(三)——**大衆の**(大衆一般のものであって、労働者だけののではない) **貧困と窮乏**にかんする句にも言いあらわされている。

革命的階級の党は、他の諸階級の困苦とその困苦を救済する手段とについての**自分の見解**をそれらの階級に述べ、自分の名においてだけでなく「**貧困と窮乏の生活をおくっている**」大衆全体の名においても、資本主義にたいする**自分の宣戦布告**を行うという**形でしか**、他の諸階級の条件的な革命性を言いあらわすことはできない。すでにこのことからひとりでも出てくる結論は、この教えを受け入れるものはわれわれのほうにやってくるにちがいないということである。もしわれわれが、そのうえまだ特別にこのことを綱領のなかで指摘し、このような頼りにならない分子がわれわれの立場にうつってくる**ならば**彼らは革命的になるであろうなどと声明しようと企てるとすれば、それはまったくこっけいなことだろう! そうすることは、そうでなくともわれわれを十分に信用していない中途半端な、

へなへなの同盟者たちのわれわれにたいする信頼を打ちこわす、まさに最良の手段であろう。（われわれがわれわれの綱領の実践的部分で、小生産者（たとえば農民）に「好意」をしめせばしめすほど、綱領の**原則的**部分では、この信頼しえない二股的な社会的分子にたいして、それだけ「厳格」でなければならず、**自分の立場**をいささかなりともゆずってはならないのである。つまり、われわれは言う。もし君がこういうわれわれの立場を受け入れるなら、そのときには君はあらゆる「好意」を受けるであろう、だが、もし受け入れないなら、それなら、どうかわれわれのことを悪くおもわないでほしい！ そのばあいにはわれわれは、「独裁」を行いながら君についてこう言うであろう。権力を行使しなければならぬときに、むだ口をきくのは無用なことだ、と。……）

第六巻 プレハーノフの第二次綱領草案にたいする意見 P34~40

1902年2月末～3月初めに執筆

コメント

プロレタリアートの不満と小生産者の不満とを同一視していっしょにするのは、まったくまちがっている。小生産者の不満は、きわめてしばしば、小所有者としての自分の存在をまもろうとする、すなわち、こんにちの制度の基礎をまもり、この制度をあともどりさえさせようとする志向を生み出すのである。

われわれは、積極的な形では小ブルジョアジーの保守性を指摘することができる（そして、指摘する義務がある）。そして彼らの革命性については、われわれはただ条件的な形でのみ、指摘しなければならない。このような定式化だけが、マルクスの学説の全精神に厳密に合致したものである。

労働者階級の解放は、労働者階級の事業でしかありえない。なぜなら、その他のすべての階級〔と党〕は、生産手段の私的所有の〔資本主義の〕基盤に立っており、こんにちの社会の基礎を維持〔し強化〕することを共通の目標としているからである。

だから、労働者階級以外の者が必ずしも支持しない場合でも、多くの労働者が革命の道に踏み出し、もはや後戻りのできない状況の中では、プロレタリアートの独裁によって革命を守り、成功させることが必要なのである。

革命的階級の党は、他の諸階級の困苦とその困苦を救治する手段とについての自分の見解をそれらの階級に述べ、自分の名においてだけでなく「貧困と窮乏の生活をおくっている」大衆全体の名においても、資本主義にたいする自分の宣戦布告を行うという形でしか、他の諸階級の条件的な革命性を言いあらわすことはできない。

われわれがわれわれの綱領の実践的部分で、小生産者（たとえば農民）に「好意」をしめせばしめすほど、綱領の**原則的**部分では、この信頼しえない二股的な社会的分子にたいして、それだけ「厳格」でなければならず、**自分の立場**をいささかなりともゆずってはならないのである。